

会報

第十号



静岡女子短大
静岡女子大学
国文学科同窓会

會報

第十号

会報 第十号 目次

〈懐かしい恩師より〉

滅茶苦茶に小説を読んだ頃……………

池上 洵一

「思い残すことなし」ということ……………

今西祐一郎

学生はキャンパスとともに……………

須賀 一好

コロナ禍の中で……………

三木 紀人

瘦々亭骨皮道人のこと……………

復本 一郎

身辺些事……………

原口 裕

コロナ禍(下)二題 付タリ大津山國夫先生……………

鷺山 茂雄

〈特別寄稿〉

すべての命に……………

瀧 和子

ふるいけどしんせんな古本屋に―四十五年目の出発……………

田村 直美

学生時代に想いをめぐらせて……………

杉山 美帆

〈会員からの便り〉

短⑦長屋 梅子……………

短⑩岸

浩子……………

短⑪小澤

昌子……………

短⑫春田みね子……………

短⑬吹井ふじ子……………

短⑭大久保三樹子……………

短⑮佐藤

良子……………

短⑯釘丸 久子……………

〈国文科同窓会だより〉

- 大①水野 一代
- 大②牛永喜代子
- 大③鈴木由美子
- 大④吉野早枝子
- 大⑤佐々木妙后
- 大⑦田中 静子
- 大⑧赤井久美子
- 大⑩井上 明子
- 大⑪山田せつ子
- 大⑭小杉比左江
- 大⑮西藤 正江
- 大⑯岩田 葉子
- 大⑰伊藤 享子
- 大⑱海野 裕子

・ 会計報告・同窓会世話人・おおとり会理事

・ 国文科事業

第8回「おしゃべり喫茶」——静岡再発見——のお知らせ

第7回「おしゃべり喫茶」——沼津文学散歩——

文学散歩「沼津を歩く」に参加して……………道家由紀子

・ 恩師住所録

・ 国文科幹事名簿

・ 編集後記

表紙

- 絵 松瀬 千秋
- 題字 長屋 梅子
- (短大七回)



「滴々の碑」

高原博名誉教授（哲学・倫理学専攻、「短歌個性」主宰）が昭和42年大学開学記念歌として詠まれた歌。昭和49年に中川芳雄教授が発起人となり歌碑を建立し、女子大内庭に据えられた。碑背に建碑の由来、献詠歌などが刻まれている。現在は、県立大学管理棟入り口にある。平成30年、おおとり会により洗浄・色入れが行われ、きれいに蘇った。

懐かしい恩師より

滅茶苦茶に小説を読んだ頃

池 上 洵 一

比較的元気に老境にたどり着いたつもりで私でしたが、最近はずすがに弱り、かつ呆けたと自覚せざるをえず、月に二回だけ引き受けている地元新聞社の社会人向け講座も、一回終えると翌日までふうふう言っているし、人名とか地名とか忘れるはずのない固有名詞がまるで出て来なくなって絶句したり、人並み以下になったかと悟りつつあります。

そんな私が時々励まされる気持になるのは、かつて自分が著述した岩波文庫「今昔物語集」全四冊の成り立ちです。「今昔」は大きな作品で、全部を文庫本にすると少なくとも十冊にはなると思うのに、岩波は三冊に纏めるといふのです。これは無理な話で、私が静岡女子大学に在任前後に平凡社から東洋

文庫として出版した本は、現代語訳だけなのに厚めの新書版で十冊になっていました。

三冊ではひどいと歎願したが、相手は頑として受けない。なんとか説得のため客観的な材料はないかと考えた末に、この作品を材料にした近代の文学作品がどんなにたくさんあるか、一覧表にして見せてやろうと思いついて、それらしき作品を探し出し、こんなにあるのにと訴えてみた。

効果はてきめんで、それでは一冊増やして四冊にしようと言ってくれたが、同時に、その一覧表を最終冊に載せようと言う。今度は私の方が驚いて、それには漫画も入っていると言ったが、構わないとの返事で、お堅い岩波の本にしては珍しく、水木しげるの漫画まで堂々と表示されることになったのです。

しかし、彼の漫画は原典を忠実に踏まえていて、私にはとても気持よかった。芥川のように原典をひねくり回している作家もあれば、片っ端から半端読

みして作品の数だけ増やしている作家も少なくない。丹羽文雄のように自分の作品の単なる時代背景描写としてのみ、やたらたくさん利用している人があれば、福永武彦のように原典をたくさんつなぎ合わせて、自分の小説の筋そのものを作り上げている人もある。

先行研究が皆無ではないが、完全にはほど遠い状況の中で、調べるのは大変でしたが、おかげで普段は読むことの少ない大衆小説をたくさん読んだり、読んでみても空振りだったり、とにかく猛然と読んだわけで、私の家にはその頃の残骸である古本が山のように残っていて、あゝあの頃はあんな無茶苦茶な元気があったのだと、過ぎし日を思い出して元気づけられる気がしています。だから身辺整理が遅れて、ボロクズ本だらけになっているのが現実ですが……。

出版した本の紹介

池上洵一「文学の側から読んだ公家日記

—『明月記』の月—

これは次の本に掲載されています。

倉本一宏編『説話研究を拓く

—説話文学と歴史史料の間に—

二〇一九年 思文閣出版

(この本は国立国際日本文化研究センターの共同研究の成果として出版されたものです)

「思い残すことなし」ということ

今西祐一郎

「思い残すことがない」という言葉は、人生で何か区切りを付ける際(その究極は「死」であろう)に、後顧の憂いのない満ち足りた心境を示す言葉である(と、今日では用いられている)。その用法は中世にまで遡るが、しかしそれ以前、すなわち平安時代の

用法はそうではなかった。それは、後顧の憂いなき平安な心境とはまったく逆の懊悩の極み、すなわち「ありとあらゆる物思いをし尽くす」という状況を表す言葉であった。この表現がどういう風に使われているか、用例数の多い『源氏物語』で見てもよい。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心ほそく住みたるさま、こゝにゐて思ひ残すことはあらじとおぼしやらるゝに、物あはれなり。(明石)

これは、父入道の風光明媚な明石の海辺の邸宅とは別に、山中に住まう明石の君についての光源氏の感想で、こんな淋しい住まいでは彼女は物思いの限りを尽くしていることだろう、の意。明石の君の不如意な境遇への同情をいう言葉である。

このような、現代語とニュアンスを異にする「思い残すことなし」の用法は、ちょうど、「涙が涸れる」という表現が、涙を出し切って元気になるという意味ではなく、ありったけの涙を出し尽くすほどの悲嘆を表わす表現であるのと似ている。

『源氏物語』には、このような意味での「思い残すことなし」が少なからず使用されていて、概ね正しく解釈されているが、一箇所だけ、全ての注釈書が間違つて現代語的に解釈している例がある。それは、よく知られる若紫巻、瘡病の療治に北山の聖を訪ねた光源氏が、北山の絶景を目にして発した、

絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし。

という言葉である。「かかる所に」以下は、例えば「こうした所に住む人は、存分に情趣を味わいつくすことであろうな」（小学館『新編日本古典文学全集』）のように、現代語訳されるのが一般で、瀬戸内寂聴の訳も「こんな所に住む人は、自然の美しさを味わいつくして思い残すこともないだろうね」と、原文の「思ひ残すことあらじ」を、現代語の「思い残すことなし」に置き換えている。

そのような解釈、訳になったについては、その前の言葉「絵にいとよくも似たるかな」の影響であろう。しかし、たんに美しい風景を描いて鑑賞するという習慣は古代にはなかった。人跡希な深山幽谷を愛でるといふのは、近代絵画の視点であって、古代においては秘境とは世捨て人か仙人の住む場所、普通の人間が住む場所ではなかった。実際、純粹な風景画というものは、洋の東西を問わず、古代には存在しなかった。

したがって、源氏の言葉は、北山の風景を賞美し

た言葉ではなく、「北山のような人の通いも希な深山幽谷に暮らす人は、寂しきで物思いの限りをつくすことだろう」の意味に解さなければならなかった。

平安時代の物語には、「したふ（後を追う）」、「おどろく（目を覚ます）」、「あからさま（かりそめ）」、「いちはやし（激しい）」など、語形は現代語と同じでも意味の異なる語がしばしば見出される。『源氏物語』を正しく読むためには、たんに文法だけではなく、このような言葉の意味に対する理解が必要である。



学生はキャンパスとともに

須賀 一好

国文学科で教壇に立っていた当時のことを思い出しつつ近況の報告をいたします。

昭和五十七年（一九八二年）の十月、私は国文学科の専任講師として国語学の分野を担当する教員に加えていただき、静岡女子大学文学部に勤務することになりました。担当科目は、国語学の講読や演習、そして卒論指導でしたが、私に中学校教員の経歴も多少あったことからか、教職科目の授業も少し担当したと思います。駆け出しの大学教員の私にゆとりなどあるはずもなく、自分の持っている限られた数の引き出しを一杯使って授業やゼミに臨む毎日でした。その後、昭和六十一年（一九八六年）の九月に山形大学に転出することになり、四年間という

短い期間でしたが、私にとって静岡女子大学は初任者として夢中で過ごした大学となりました。

現在、私は、山形市にある東北文教大学に勤務しています。今年で六年目になります。大学のキャンパスは、周りに広々とした田んぼが残っている山形市南部にあり、静岡女子大学のように隣接する図書館や美術館、緑地公園と一体化しているような美しさはありませんが、JRの最寄り駅が「蔵王」という名前であることから想像できるように、大学から東の方角を望むと全体に蔵王の連峰が広がる自然豊かなところです。大学の規模も静岡女子大学と同じくらいで、家族的な雰囲気があるところもよく似ています。古希を迎えている私にとって、この大学は熟年教員として過ごす最後の大学になるはずですよ。およそ四十年の時を隔てて、静岡女子大学で過ごした頃の状況を思い返すと、私は授業の資料を輪転機で印刷するとインクで服を汚すのが常でしたし、学生のみなさんは「ボールペン原紙」の謄写印刷とか「青焼

き」と言われた湿式の複写機とかを使っていたと思います。いろいろと手間暇のかかる時代でした。一般向けのワープロ専用機が登場したのも、ちょうどその頃で、小さな画面を覗き込むようにして編集した文章をフロッピーディスクに記憶させて（一メガバイトですが）すごい、画期的だと思ったものです。

現在とはというと、薄いノートパソコンを教員も学生も持ち歩き（何百ギガバイトもデータ保存できる）、発表資料もプレゼン用ソフトを使うなど、情報機器の利用が不可欠になりました。ずいぶんと変わったものです。それに加えて昨年からの新型コロナウイルスの感染拡大が原因でパソコンやスマホを介しての遠隔授業がいきなり開始され、一気に教育のICT環境を進めました。それでも、学生の感染者が発生せず、地域の感染状況が落ち着いていれば対面型の授業は行われるでしょうが、感染者をなるべく出さないように、グループ活動や話し合いなどできない不自由さも抱え込みながら、授業をしな

ければなりません。おそらく、こうした問題を解決する新たな工夫も生まれるでしょう。しかし、こうした状況になって、人と人とのリアルな交流の中で学ぶことの意味や良さも見えてきたのではないのでしょうか。人との距離を保つことが「ニューノーマル」になっていますが、完全に離れてしまっていないのだと思います。

大学での私の部屋は、感染防止のために廊下に面したドアを開けたままにしています。そのため、通り過ぎていくマスクをした学生たちの話し声が次々と聞こえてきます。授業のこととか先生のこととか、断片的に聞こえてくる話題は、昔も今も変わらないようです。時には授業で習ったのか、女子学生たちが幼児向けの歌を合唱しながら通り過ぎていきま

す。若いころの私だったら、廊下は静かに歩きなさいと注意したでしょうが、今はキャンパスに学生が集うっていいなと思います。（これは私の年齢のせいも多分にあるかも。）

コロナ禍の中で

三 木 紀 人

いつ終わるか解らないコロナ禍の中、今年の三月末を以て大学の校務から離れました。初めての勤務先大学だった静岡女子短大に赴任したのが昭和四十一年で、それ以来、いつのまにか、半世紀以上が過ぎました。改めて、古歌の「流れて早き月日なりけり」などを折々思い出しつつ閑居と散歩の日々を送っています。

今の生活の中で、外出を伴う仕事といえば、社会人対象の講座などに出向く事だけです。都心に往復するのは危険だと自覚しながら、昨年度は数回経験しました。今年は自粛しようと思っていたのですが、昨年中止になったある大学の講座から再度のお招きを受けて、かなりためらいつつではありましたが、四回にわたって行きました。設営して下さる方々のご苦勞に応えないわけにいかないからなどと、反対

する家族に言い訳しての事です。参加者はごく少数だろうと思っていました。予想より多少多くの方々が集まって下さいました。教室にはさすがに各種配慮が施されており、いつになく緊張感が漂っているようでした。

この講座は約三十年にわたって年に二回、夏と冬に行われてきた講座で、おなじみの方も少なくないのですが、マスク着用の姿で向き合うと、すべて初対面の方のように思われ、かなり戸惑いました。昨年出向いた別のいくつかの場では、受講者の皆さんと相当な距離を置く事を条件で、当方のみ、マスク免除をお許し頂いて話したのですが、今回はそれも叶わず、物々しく、声の通りにくいマスク越しの話となりました。

取り上げたのは「方丈記」の災害関係の記事についてです。それに関連して最初の七月一日に、源実朝に言及しました。鎌倉で彼が鴨長明と再三にわたって交談した事実が「吾妻鏡」に記載されており、その中で災害が話題になっていたと思われるためです。実朝の「金槐和歌集」末尾の

山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

に自然災害が詠まれている事に言及、「山は裂け」を理解する上で、相模の大山安布里神社あたりで関東大震災の時に発生した山津波が参考になるかもしれないと、社務所などで聞いた事の受け売りなどを述べたのですが、その翌日に、これも実朝に縁の深い伊豆山権現の近辺で土石流の被害が発生し、源頼朝と北条政子ゆかりと伝わる（正しくは別の石橋とも）朱塗りの逢初橋あたりの惨状が、テレビ画像で何度も放映され、そのすさまじさに仰天しました。

さらに、翌週の講座では、「方丈記」にちからって出て来る東大寺大仏の頭部落下という不祥事から、これが起こった貞観年間の富士の大噴火にも触れたのですが、その数日後に色々調べてみて、富士の噴火をめぐる新情報を知りました。

それによると、今後の富士山の噴火に関するハザードマップの依拠史料が、江戸時代の宝永の噴火についてのものから貞観の噴火の被災状況のそれに最近切り替えられたそうです。

さらに、ネット情報などを見てみると、迫っている富士の噴火の日付について、今年の八月二十日と予想しているものもありました。講座が七月に何とか終わり、八月も無事に過ぎて、ひとまず安堵しましたが、以後も、新型コロナナだけでなく、噴火への心配で落ち着かない気分が誘われがちになり、それが今も続いています。

付記

今朝（九月三日）の朝日新聞横浜版に「火山ガス高濃度、屋内退避 大涌谷で67人 人的被害なし」などという見出しの記事があり、さては富士の噴火の前兆かと、ますます不安になりました。パラインピックや政局を巡る記事満載の紙面の中の一見ささやかな情報ですが、今の私にとっては、見逃しがたい記事で、さっそく切り抜きました。

それにつけても、富士山に近い地域にお住いになる方々はくれぐれもご用心をと祈っております。

瘦々亭骨皮道人のこと

復本一郎

近年、相ついで御逝去になられた上條彰次先生、大津山國夫先生をお偲びしつつ、両先生に捧げさせていただきまます。両先生、はたして呵々大笑して下さるや否や。合掌

平成十一年（一九九九）に出した拙著『俳句と川柳』〔講談社現代新書。現在は講談社学術文庫の一冊〕執筆のころから、ずっと気になっている人物に瘦々亭骨皮がいる。今日風に言えば、骨皮筋右衛門を雅号としているわけである。この骨皮、明治二十四年（一八九二）八月十四日刊、任風舎川柳編『柳風肖像狂句百家仙』（書林松崎半造）に収録されており（つまり川柳作家として認知されていたということである）、左のごとく記されている（冒頭部分を引用する）。

氏、姓は、西森、名は武城。伊予国松山の人に

して、浅草区亀有片町に住す。少して、博学、善く文を属す。其最も長ずる所狂文に在り。（以下略）

今年、百二十回忌を迎えた正岡子規と同郷というわけである。骨皮、文久元年（一八六一）の生まれであるので（講談社版『日本人名大辞典』参照）、子規より六歳年長。『柳風肖像狂句百家仙』が出た時、骨皮は三十一歳、子規は二十五歳。同郷の二人が、お互いを認識していたか否かは、今のところ定かでない。川柳人を代表する一人として認知されていただけあって、骨皮には、博文館から出ている東洋文芸全書の一冊としての『古今川柳一万集』（明治二十五年十月八日刊）の著作がある。骨皮自身の句を一句あげておく。

土瓶酒人を茶にした宇治の里

骨皮

茶所の宇治で、何と見られたか、茶ではなくて、土瓶酒を振る舞われた。馬鹿にするな、といった意味。「茶にする」には、馬鹿にする、の意味があり、この表現が味噌である。

この骨皮、多くの著作があり、ぼつぼつと集めているが（目下、三十三冊ほど）、最近、初期活動期

の稀観本きこうほんとも言ってもよい「狂文」の本を入手した。明治二十一年（一八八八）六月九日刊の『面白奇文滑稽狂進怪』（金桜堂）が、それである。その中の一つ「即席三題ばなし」を紹介させていただく。骨皮、「○小町の洗濯 ○雨夜の烏 ○叶はぬ恋」の三題で狂文を作ろうというわけである。新型コロナウイルスの蔓延で、先の見えない鬱陶しい日々が続いているが、骨皮道人に導かれつつ、大いに笑っていただきたい。

※ 小野小町が某所あるところへ洗濯あらひ張などの賃仕事を創めました。さすがに小町だけに盛りは少し過ましても未だ香りが残つて居りますから、顔が見たい為に、無暗むやみに洗濯物を担かかぎ込む。中に極きま随ずい自惚おぼれの強い男が御座りまして、毎日〳〵小町の許もとへ通つて根気よく口説くせきました。小町は更に受付うけつけませぬゆゑ、是これは一番工夫をかへて、大雨の降る晩か大風の吹時ふきときかで、小町が淋しみしがつて居る処へ出掛て行けば、本当に実があるよ、と御座るに違ちがひないと自惚おぼれの上塗うへぬりをして、或る夜の十時頃じゅうじころから篠しのを突つくとくに雨が降ふり参まりま

したので、今夜こそ大願成就、ほん望もちうを遂とげると必定と、蓑笠で我家を立出たてました。泥ぬか濁ぬみの中へバシヤリと顛ころぶと、路傍みちばたの木に眠なつて居た烏からすが目を覚し、阿房あほう〳〵と啼なきました。

いかが。皆さんは、あの小町の歌へ花の色はうつりにけりないたづらにわが身世みよこにふるながめせしまに（『古今集』）や、謡曲「通小町」中の深草四位の少将ちりやうの百夜通ももよかよひのエピソードを思い浮かべながら、大いに笑っていただけたらう。

出版した本の紹介

◎近年刊行の拙著には、復本一郎編『子規紀行文集』（岩波文庫、二〇一九年十二月十三日刊）がございます。

身辺些事

原 口 裕

残念なことに、上條先生が令和二年二月に、また令和三年二月三日、大津山先生が亡くなられました。心より哀悼の意をささげます。

私はこの二月八十八歳になりました。近頃では珍しくもないことですが、静岡市に住む娘一家が祝いに来てくれて楽しい一時をすごすことができました。

卒業記念でいただいた庭の木蓮は今年もかわらず白と紫紅に咲き別けて楽しませてくれました。これも年月をへて直径三十センチにもなる大きな木となっています。女子大を思いだすよすがといえ、校庭の一隅にあった万葉植物群に名札をつけたのも楽しい思い出の一つです。

コロナ禍で全く外出もしませんので、家の中の生活の些事を記すことにします。

朝七時起床。食事は

朝食 六枚切の食パン一枚。コーヒー一杯。牛乳カップ一杯。ヤクルト一本。

昼食 うどん・ラーメンそばなど、卵入り。

午後三時 バナナ一本。ヨーグルト一本。

夕食 宅配弁当。

これで十分な食生活の毎日です。息子と二人だけの生活ですから、調理は全くしません。

余暇はテレビ視聴がほとんどで、ネットフリックスやフルーなど楽しんでいきます。中国や朝鮮の歴史もので、史実にとらわれないで自由に作られたものなど面白いものです。

入浴は週二回で、十年前、入浴中心筋梗塞で亡くなった妻を忘れることができません。倒れた妻を浴槽から出しても、なす術もなかったことが残念でなりません。



大津山先生と上條先生

退屈な身辺些事をしるしました。他に書くことも
ありません。お目を汚してすみません。
皆様のこれからの御健勝をお祈りしつつすこして
まいります。

終



コロナ禍（下）二題

付タリ大津山國夫先生

鷲山茂雄

めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲

隠れにし夜半よはの月かけ

『百人一首』にも採られ人口に膾炙した紫式部のこの歌は、家集によれば、

早うより、童友わらはだちなりし人に、年ごろ経て行
きあひたるが、ほのかにて、七月十日のほど、
月に競ひて帰りにければ

の詞書が付され、冒頭に置かれている。『式部集』の研究ではこの第一首から諸説紛々、悩まされるが、「見しやそれともわかぬ間に」の句に幼なじみの面変わりふりを読み取ったのは清水好子氏の岩波新書『紫式部』（昭和四十八年刊）であった。裳着もぎ（成女式）前に別れたきり数年ほどの間をおいて再会した

幼なじみに対する感慨、清水氏は「少年少女の十二、三歳ごろの成長の速さ、変貌の激しさは、一年逢わなくても見違えるほどであるのに、四年も逢わなかったら、ほとんど別人と見紛うばかりである」と読み解く。

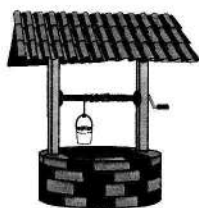
新型コロナ騒ぎの今日この頃、親兄弟、身近な人でさえ容易に逢えず、ましてや育ちざかりのお孫さんとも久しく対面できない嘆きはいかばかりか。そんなニュースを見たり聞いたりしているうちに、ふと『紫式部集』の冒頭歌と清水氏の読みを反芻することになった。新書「あとがき」によれば、昭和四十四年度から四十七年度まで関西大学でこの『式部集』を講義したとのことであるが、その関西大学で中古文学会が開かれた折、懇親会の席で歓迎の挨拶をされたのが、清水先生の講筵に列したという中世文学の教授の方で、その清水先生の『式部集』の講義たるや、前期いっばいかけて、たったの一首の読解に終始した由、面白おかしく話されたものであつ

た。

さて、ところで、先頃世界農業遺産に登録されたという茶草場農法を喧伝する掛川市の粟ヶ岳ハイキングコースを歩いてきた。最近になって頂上の展望台が整備され、富士山・駿河湾を望む絶景を楽しんだのだが、実はこの粟ヶ岳はかつては無間山とも言われ、阿波波神社の下段にあった無間山観音寺の「無間の鐘」で世間に知られていた。その無間の鐘とは、この世にあって福德を与えて下さいと思いを込めてその鐘を撞けば、貧しい者も裕福になり、その替わり、来世では無間地獄に堕ちるといふ。この鐘は室町時代明応のころ住持が古井戸に埋めてしまったといい、無間の井戸というのは阿波波神社近くにあるのだが、観音寺はすっかり廃寺になってしまっている。無間の鐘は近世文学作品にはしばしば登場するのだが、今さえよければ、後はどうなってもかまわない無間の鐘伝説は、どうにも他人事でない気がしてしまふ。現今のコロナ騒ぎはまさしく無間地獄そ

のものではないか。われわれは、いつしか無間の鐘を撞いていたのではなかったらうか。原発・リニア問題もまさしく無間地獄まっしぐらの感がある。

ここまで書いてきたところ、「おおとり会だより」が届き大津山國夫先生の御逝去を知った。もう十数年前のこと、先生と草薙の居酒屋で一献の折り、「女子大時代が一番よい時代だった」としみじみおっしゃり、また自分の亡くなった時は葬儀委員長をたのむとも言われた。冠婚葬祭嫌いの私は、すげなくお断りしてしまったものだ。その一コマがありありと目に浮かぶ。(二十一年四月二十日)



特別寄稿

すべての命に

大学十七回 瀧 和子

今も、忘れられない光景がある。

駅から自宅へ向かう、西日が当たるバスの中。私は、確か十代後半だったと思う。斜め前に座っている女性が抱っこしている赤ちゃんの顔が、こちらを向いていた。

その時、唐突に思ったのだ。「この世の赤ちゃんは全て、無条件に愛されるべきだ」と。

特に子ども好きだったわけでもなく、子どもが欲しいと思っていたわけでもなかった。それは脈絡もなく、降ってきた、とでもいふべき言葉だった。

それから四十年近く。その体験は、なぜか意識にのぼることはなく、女子大の国文科に入り、学校法

人の事務職に就職した。

その後結婚し、四人の子どもを産み、子育てをしながら、子育て支援の活動や、小中学校での命の授業の講師活動を続けている。

妊娠期から赤ちゃん期の母親支援をするようになったのは、確かに自分の出産子育て経験がきっかけだったけれど、自分の子どもが大きくなってからも、そこから離れないでいるのは、なぜだろう……と自問したときに、思い出したのが、冒頭の光景だった。

「ああ、そういうことか。」と腑に落ちたような感覚があった。あの時のあの言葉が、私の根っこだったんだな、と。

赤ちゃん期の子育てにおいて、お母さんと赤ちゃんの愛着の絆をしっかり結び、幸福感のある子育てとなり、赤ちゃんにとっては、自分を取り巻く世界への信頼、自己肯定感につながっていく。

けれども、赤ちゃんを産めば自然にその絆が生じる、という簡単なものではない。また、母親は子どもに無償の愛を注ぎ続けられるもの、という幻想が、お母さんたちを追い詰め、子育てが苦しい、子どもを可愛いと思えないという、虐待に至る状況につながる。

「初めから虐待しようと思って子どもを産むお母さんはいない。多くは、SOSを出せず、必要なサポートを受け取ることができず、精神的に追い詰められている。」という臨床心理士の言葉を聞いたときには、「そういう状況だったなら、私も虐待していたかも」と、ハッと胸を突かれた思いがした。

また、子育ては自然な営みではあるが、社会的な営みでもある。つまり、人は「教わり」「学び」「共同して」子育てを続けてきた。

核家族化が進んでからは、赤ちゃんを抱っこした

り、身近に感じる機会もなく、出産して初めて「これが赤ちゃんか」と「未知の生物」として対面する場合がほとんどである。

「子育てがこんなに大変だなんて、知らなかった。」私も、何度も何度もそう思った。

「まなぶ」という言葉は「まねぶ」（真似をする）から来ているという。いまは、なかなか「真似をする」機会が得られないからこそ、「子育てを学ぶ」機会を作ることが必要である。

昨年から、主宰するNPO法人では「子育て∞親子育ち学校」を始めた。六人の専門家から、子育てについて幅広く学べる場として、今年も十一月からオンライン開講する。子どもと一緒に親も育つ、そんな子育てを応援している。

一方、子育て支援とは別に、「誕生学」という命の授業も、私のライフワークである。子どもたちに「あなたたちは、お母さんのお腹の中で、自分の体

の能力、命の力をいっばいに発揮して生まれてきた。そして赤ちゃんだった一年間、とつても愛された歴史を持っている。」と伝えている。その一年間、一日だって放っておかれたら、命は続かなかったのだから。

つい先日いただいた、小学五年の生徒さんの感想に、

「自分たちが生まれてきて この世界の希望だとしたら

次の世界の希望の人に

滝さんのお話を聞かせたいと思います。」とあった。

四十年前に無垢の命に触れて「愛されてほしい」と強烈に感じた思いが、次の世代の瑞々しい人に受け取ってもらえた。その嬉しさとともに、自分以外の命を思う、その温かさに涙がこぼれた。どの命も、生まれてきてくれたことに感謝。



ふるいけどしんせんな古本屋に

— 四十五年目の出発

大学六回 田村直美

本が紙屑として捨てられる時代、長年古本屋やってきたけれど、今が一番危機的な状況だ。

書斎の本棚に全集をずらっと並べ、知識人として誇りを持っていた時代は終わり「断捨離」とか「終活」という言葉のもとに本は真っ先にバツサリ捨てられる。古書市場でも岩波に代表される全集の暴落、国文、歴史など今まで確実に利益の出たものの相場はなくなり、山と積んで、千円の声が出ず、引き荷になったりする。静大の先生が退官する時「学生で今一番日本史に詳しいのは中国からの留学生の王さん」と嘆いたのはもう十年以上も前のことだ。大学から国文科も史学科もどんどん消えていく。自国の文化に興味のない人たちが育っていく。

ふるほんの
時代舎
じ だい しゃ



精神の冬に旗を起てる

〒430-0947 浜松市中区松城町106-16
TEL・FAX 053-453-1334
mail: jidai5410furuhon@docomo.ne.jp
朝10時～夜6時 火曜定休



今や店売りの古本屋は次々消え、ネット専門業者が増えている。ある若い業者は本は読まないけれど「商材」として手頃だからと言う。本にこだわるわけではないのでCD、DVD、ゲーム、おもちゃ何でも扱う。私たちの店はいつのまにか時代に取り残されていた。「いやあまだこんな店あったんですね。昔のままの古本屋だ」と言われるようになった。そんな店も建物の老朽化で移転となった。移転作業中今更ながら気付いた。老朽化したのは建物だけではない。私たちも充分に老いた。

卒業後、一年で始めた古本屋。結婚の費用のかわりにと資金を親に出してもらった。私は実家から店に通い、彼の方は店の奥にベッドを置き、夜遅くまで店を開いた。「あの頃は暴走族にまでお茶を出してたよ」と今では笑い話。

最初の本は静岡の太田書店から仕入れた。資金不足で本棚はまだガラガラだった。親戚や、バイトしていた静岡大電研の先生や学生がいらぬ本を持って

きてくれた。五月末に開店したものの資金は使い果たし、三日で売り上げを出さないと六月の家賃が払えない。無謀とも言える開店の仕方だった。幸い新しもの好きな土地柄で初日からたくさんの方が来店、何とかなつた。「こんな本が手に入った」と喜び、「こんな本が売れた」と喜ぶ毎日だった。

仕事に余裕が出てくると、仲間たちと会をつくり、講演会を十回程開いた。内田良子、石川憲彦、奥地圭子などの講演記録集はテープ起こしから編集までやって勉強になった。未だによくわかってないけれど。

移転前の店にゆすらのさんの集めた署名本が並んだ。晩年は「もう読むわけじゃないけどあんたとはこはがんばってるから応援してあげる」と本を買ってくれた。ゆすらさんは著者の家にひょっこり訪ねて行く。岡本太郎の家の応接間に「座ることを拒否する椅子」があったことを楽しそうに話した。茶目っ気たっぷりに「きらいな人はあのトゲトゲの椅子に

座らされるんだに」署名だけでなく識語が入ったものもあった。「草には草の花が咲く 杉浦明平」「生きることは死ぬことよりむずかしい 森繁久弥」「死なば己がむくろをつつめ戦いのちりにそみたる赤旗をもって 荒畑寒村」それぞれ味がある。それを引き出す魅力がゆすらさんにはあった。戦後すぐ自宅を「新しき村浜松支部」とし、雑誌「新しき村」を発行した気骨ある人だ。

六月二十六日、移転した店がオープンした、コロナ禍でもあり、ひっそり開店。それでも同業者からたくさんお祝いが届き、常連のお客さんも祝ってくれた。店が小さくなってお客さんとの距離が縮まり、若い子たちも声をかけてくるようになった。明治の教科書や浮世絵に興味を持ちたり、彼らのわくわく感がこちらにも伝わり、元気をもらった。さあもうひとふんばり！

学生時代に想いをめぐらせて

大学十四回 杉山美帆

大学を卒業して三十七年が経ち、今年は還暦を迎える齢となりました。子供を育てながら仕事を続け、定年を迎えることができた事、人生の支えとなる友人と出会えたのも静岡女子大学で学び得た財産だといえます。

現在は県立大学として統合され学舎も一新されてしまいました。が、記憶に残る大学時代の思い出を懐かしい写真とともに振り返ってみたいと思います。

大学へは草薙駅から坂道を登ります。県立公園、県立図書館に隣接していた大学は、富士山を眺望できる自然豊かで贅沢な空間でした。

今年お亡くなりになった大津山国夫先生は武者小路実篤の研究者でしたので私たちも「新しき村」について学び、『読書とは先人の苦しみの追体験であ

る』と教えていただきました。また漢字検定もなかった時代に毎週それはそれは難解な漢字テストがあり苦戦したのも今ではよい思い出です。

私の専攻は国語学でした。決して文法が好きなのではなく原口裕先生の講義にはエンターテイメント性があり、とても興味深く、データを分析して結果を導く研究方法が私の性格に合っていたからです。原口先生は試験問題もさん新でした。中森明菜さんの楽曲「少女A」の歌詞より『わたし、少女A』を国語学の視点で説明せよ』とあり、ひらがな、カタカナ、漢字、外来語がいつどのように日本で使われるようになったのか、なぜ日本人はさまざまな言語表記を受け入れ使用することができたのかについて記述した記憶が曖昧ながらあります。

奨学金やバイト代が入ると、毎月一冊ずつ『日本古典文学全集』を買い求めていました。三十五年前で二二〇〇円は学生にとっては高額でしたが、今手元にある本も大学時代の宝物といえます。定年を迎

え時間ができたら『源氏物語』を読み返すのもいいかもしれませんね。



正門から学舎への道

会員からの便り

人生百年時代到来に高齢者として一考

昨日は本県三日間かけて走り抜ける東京五輪の聖火リレー最終日でした。障害や差別・コロナ禍等の様々な困難を乗り越えて、トーチを繋いだランナーたちに、私はくぎ付けとなっていました。実に美しい笑顔と人間ドラマに触れ、これまで忘れ去られていた『大切なもの』に気づかせていただいたのは、私だけではなかったでしょう。今回の東京五輪が、日本の良き生活文化を、日本の根底にある民族の良さを掘り下げ、取り戻せる機会となり、世界に知らしめることができれば、世界平和への貢献に一翼を担うことにはならないだろうか、深刻に考えているのも事実です。

さて、人生百年時代への到来により、人も企業もこれまでの足跡を根本から見直すべく準備に余念がありません。若者が「働き方改革」をするように、私たちも健康で明るく元気に百歳を迎えるためには、自らの「生き方改革」を放っておくわけにはいきません。五輪のアスリートたちが見せてくれているあの努力の何百分の一でも感化されて、頑張っている仲間がいるだろうかと思ひ、私たちは一つの団体でしたが、生き方調べ、社会貢献調べをすることにいたしました。その結果は私たちの期待をはるかに超えたものでした。今や労働者不足に悩む国としては、元氣な退職者に労働力の提供を呼び掛けていますが、それに呼応するかのようには、かくも多くの仲間が胸を張って社会貢献に従事していたとは、と嬉しくもあり頼もしくもありました。

退職されても、培った能力や技能を生かしてリーダー的存在で頑張っておられる仲間に、そしてまた趣味や生きがいを求めて、人生豊かに生活しておら

れる方々に触れ、アスリートたちと同様、決してとどまっていけないということが確認でき、熱いエールを送らずにはいられませんでした。

しかし、年齢を重ねるにつれ、誰もが遭遇するであろうと言われる次の三つ、所謂、

一つには 健康への不安・心の病

二つには 生きがいの喪失

三つには 孤独

この障害を少しでも低く抑えて、幸せな生涯を創り出す責任は他ならぬ自分自身であるということも認識して、己を生かしていくことも大事かと思いません。

更にこの三つの障害を乗り越えるためにも、社会貢献は重要な価値を持つものであると共に、高齢者が積極的に体を呈していることは、微力であっても若者を支え、国を支えていることに変わりなく、大いに誇りを持ちたいものであります。

従ってお元気で居られるうちは、社会ニーズに合わせ、積極的に外への関わりを持ち（今は自粛？）、前を向いて生きる姿勢を忘れないこと、それが世のため人のためしいては己のためとなり、残された時間を爽やかに謳歌することに繋がるのではないかと、思います。如何でしょうか。

短大十回卒業 岸 浩子

サロマ湖の牡蠣と歌と

ある日曜日の朝のことである。

「大変です。岸さん。高口さん（短十回生）のお歌が朝日歌壇に載ってます」と電話が入った。

電話の主は短歌教室の仲間で、朝日歌壇の常連でもある彼女は、ハードルの高さを熟知しているだけに「しかも、三人の先生に採られています」と声を裏返している。

即刻、新聞を買いに走った。

☆ 牡蠣むけば命浸せるサロマ湖の水ほたはたと滴
らせた
高口玲子

短歌界の大御所の高野公彦、馬場あき子、佐佐木幸綱の三人の選者に採られている。

☆がまぶしい。☆は複数の選者に採られた歌の上に輝く栄光の星印である。高口さんの歌が掲載される少し前に、NHKの番組でサロマ湖が取り上げられ、牡蠣の紹介もされていたのと相俟って、目の前に瑞瑞しい牡蠣が水を滴らせている姿が目には浮かぶ。

高口さんを熱海短歌教室にお誘いしたのは、随分久し振りにお逢いした玲子さんから「短歌ね、お勉強したいと思ってるのよ」をお聞きした折が、きっかけと成っている。

私は二〇〇〇年に熱海に転居して間も無く、以前より興味のあった短歌サークルに入った。四、五年程経て、ぼんやり短歌の輪郭が見え初めた頃、熱海短歌教室が開講され、若山牧水賞を始め、多数の

賞に輝く谷岡重紀先生の受講生となり、当時四十代だった先生の「短歌をやる以上、百点満点の作品を。さもなければ零点となっても良しする作品を」の一言に心を鷲掴みにされ「やってやろうじゃん」となった。

それから十年程たったあの日の、高口さんの一言に「是非、熱海短歌教室の通信コースを受講して下さい。先生は天下一の名講師です」と手紙を書いた。そして、私の誘いに気持良く応じて下さった玲子さんから送られて来る毎月の歌が、私を元氣付けたり、感動させてくれている。

特に心に強く響いた玲子さんの作品は

満州の野に笑っている若き母頭ちくる季ぞさわらび
萌ゆる

はぐれたる影のひとひら真昼間の路地にたゆたう
鳥揚羽よ

廃鶏と決まる一羽を抱きとれば直に伝わる命温と
し

十重二十重くれない深き花びらをひらく牡丹の衣
ずれを聴く

北壁のクライマーのごととりつきて喉のどの奥の錠剤
落ちず

まな板のトマトむずかるふてくさる包丁研げよと
なじりて果てる

等等、胸の奥につんと突き上げる切なさ、懐かしさの迫る歌や、思わずウフフと笑みの零れる、可愛くてウィットに富んだ作品まで、実に自由奔放、北の大地の大らかさと優しさと、純な温かさに満ちている。

これからもずっと、チャーミングな玲子さんと一緒に歌を楽しめる私は、つくづく幸せ者だとの思いを、年と共に一層深めている。

短大十一回卒業 小澤昌子

星田和子様を偲んで

国文科卒業と胸を張って言える人。その人は星田和子さんです。令和三年二月十九日が一周忌でした。胸を張って国文科卒と言えるのは、お便りは達筆な文字で、内容もくわしい。はがき全面を使い、乱れたり、斜めに傾いたりすることなく整然としており、私はまず眺めて感心。文章を書くことは多分苦にならない方ですから、どなたにも同じ様なお便りが届いていたことでしょう。

学生時代、和子さんは三島から、私は沼津からの電車通いで、帰りは一緒でした。二年間朝早く出発し、夕方帰る遠距離通学はあっという間に過ぎてしまいました。帰りの車中で時々一緒に食べた駅弁は楽しい思い出です。

卒業後も彼女の筆まめのおかげですと交流がありました。最後のお別れになってしまったのは二〇一八年九月十九日、都立美術館へ行く約束をした時です。この日は高齢者無料の日であった為に、入口から続く石段の上まで長い行列で、それを見て、やめよう。やめようということになりました。

「渋谷の文化村の美術館へ行こう。頂いた招待券を持っているから。」

と和子さんがおっしゃり、そちらに向いましたが、ここも休館でした。その為食事をしながらいつもよりおしゃべりする時間が沢山ありました。「じゃあ、またね。」と元気で別れたのが最後でした。

最後に頂いたお便りは、美術館がかなわなかった後に届いた文の引用です。

「美術館行きは失敗でしたが、おしゃべりとゆっくりした時間こそ最大の収穫でした。(結びは)私も十一月二十四日で七十六才です。よく生きたものです。父五十九才没、兄六十四才没が笑っています。」

精一杯七十六才まで生きてきた我身を振り返りながら感心していたのかもしれない。

筆不精な私にあきることなく、東からそんなお便りを下さった和子さん。また西からは庭の草花の様子が入ったお便りを下さった中学時代からの友達、信子さん。二人共いなくなり心にぽっかり穴が空いてしまった気持ちです。

「ポーと生きているねえ。」

と天国で笑われているかもしれませんが、私は、元氣を目標に生きて行こうと思います。

安らかにお休み下さい。



星田和子さん (1989年撮影)

私にできることは

昭和三十九年、東京五輪が初めて日本で開催された。私は、富士山の海拔五百米の小さな小学校の新米教師。国内は五輪一色で、観戦と応援で湧きあがった。東海道新幹線の開通もこの時で、新型車輛が超特急で走る姿は圧巻。富士山をバックに走る雄姿は、日本一。

五十七年後の今年も、東京五輪の開催が目前に迫っている。前回と異なることは、コロナ禍で色々な問題を抱えて、二転三転しての開催ということ。世界中が感染拡大と蔓延で、先が見えない。そして、今年はある東日本大震災から十年の節目の年。復興五輪というけれど、大丈夫かしら。

私は、阪神淡路大震災の丁度十年目の日に神戸に

行った。三宮駅から東遊園地周辺、長田地区等を訪ねて、(えっ、あの家屋やビルが倒壊して然えた町なの!)と驚いた。新しい店やオフィス、集合住宅等のビルが沢山建ち並び、人々の生活も活気づいていた。東日本大震災の被災地は、十年でどれ位復興したのか。テレビ、新聞、被災地での自分の見聞から、復興は遅れていると思う。特に福島県は、東日本大震災の日以来、私はテレビを見続けた。ボランティアの方々を見て、何もできない、何もしない自分に歯痒さを感じて、何か自分にもできることがあるのでは：その為には自分で被災地の様子を見聞きしなくてはと思い、震災二年目の三月十日から私の一人旅が始まった。宿と交通状況で行きたい所に行けない、時間がかかる、から少しずつ訪ね歩きやすくなっていき、岩手県の五市二町、宮城県の二市を訪ねた。

被害の大きさと景色はどこも同じ。瓦礫はあちこちに積まれ、家屋の基礎だけが残っていて、草が生

えたり水が溜まったりしていた。沿岸部の平地は全て津波で流され、乗り上げたタンカーや建物の骨格、傾いたビルの無残な姿だけが、今も私の脳裏に焼きついている。一番ショックだったのは、石巻市立大川小学校。タクシーから降りた瞬間足が竦んで絶句！運動場の横は山。(どうして山に逃げなかったの)と。近くを流れる旧北上川の河口から上がってきた津波で、児童、職員が大勢犠牲となった。大槌町保育園では、先生と園児が必死で山に逃げて全員助かったけれど、保護者の迎えて帰った園児は、津波にのまれて亡くなったという。園長先生の切ないお話。

今はコロナ禍で行けません、盛土をして住宅が建ち始め、三陸鉄道の復旧で大槌駅周辺は賑わってきたと、交流している友人の話。私一人では何の力にもなりません、この大震災を忘れない為に私ができることとして、今迄通り今後も訪ねたい。歩けるうちは。

最後に、震災で亡くなった生命も、新型コロナウイルスで亡くなった生命も同じ生命。物品は復興できても心の傷は一生消えない。非常事態宣言下の東京五輪が、今以上感染拡大にならないで無事に閉幕すること、一日も速く収束するよう祈りながら応援したい。

春田さんおすすめ本

① 「ひまわりのおか いのちのえほん」

松成真理子 岩崎書店

② 「あの日 くおつか保育園 3・11」

語り 八木澤弓美子

再話／絵 森谷明子

監 修 静岡うみねこの会

③ 「手紙 お母さんへ」

文 堀川貴子

絵 堀川文夫

発行 学友会教育研究所